

ツコ経済の中心地となっている。

新しい街なのでここには目立った歴史的建造物はなく、一見ヨーロッパの街に足を踏み入れたような感がある。

この旅で私が見たモロッコは、アンダルシアとベルベルの混血文化の色合いが濃いように思えた。アフリカのスペインとも、スペインのアフリカとも言える奇妙な色合いのものであった。全くのイスラーム教国でありながら、ヨーロッパが根づいている奇妙な国だ。スペイン最<sup>び</sup>良<sup>き</sup>の人なら、一度は行ってほしい国の一つである。

「おおいし・けんたろう 早稲田大学講師」



## アンダルシア史の中のベルベル人

石原忠佳

### 二〇年前の思い出

永川玲二氏との出会いは今から二〇年ほど前の一九八五年、私がスペイン国立グラナダ大学哲文学部の五年次生で、卒業論文を手がけていた頃である。

氏を紹介されたのは、グラナダ旧市街区のアルバイシンを下ったエルビラ通りにあるレカチャという居酒屋であったと記憶している。都立大を辞職された氏は、今後はセビーリヤに長く滞在して、コロンブス研究に従事したい旨を語っておられた。その後セビーリヤを訪れる際には、グアダルキビール河に臨む氏の三階建てのアパートには、何度もお邪魔することになった。それ以来一三年以上も経過した二〇〇〇年、永川氏の訃報を耳にした。その折、氏が生前「アンダルシア風土記」を岩波書店より出版（一九九九年）されている旨を友人より知らされ、当時の出来事が、懐かしさとともに脳裏に浮かんできた。そして現在、氏がこよなく愛したアンダルシア地方とモロッコの二つの地域を紹介する運びとなった。氏の生前の研究活動をねぎらうとともに、ご冥福をお祈りしたい。